

のりだえ、苦しむのは倍々の見ろ眼も痛まし、いで見兼ねて、附添人達が医師に抗議すれば、月ノミか喰、エモかゆい人とかゆくない人とがある、痛むのと痛まないうとは其人による、山と医師は、うそをいって居り、被害者の苦口顧みられなかつた。今村、山口、氏等、争議団幹部は各支部代表十二名と共に、病院に行き、ヤク女、苦しむを見て、三度診察方を頼んだ。

斯くて、磁石管を合にて診察は行はれた。

医師曰く、「たいした事はない打撲はしてゐるか熱も引いてゐる様だから心配する程の事はない、二、三日もすれば治るであらう。」

幹部問、「原因は打撲でしやうか？」

医 答、「打撲でせう。」

問、「アバラの骨は折れてはいないか？」

答、「骨は折れてゐない様に見える。」

然し本人は打打された胸に一寸でも医師が手を觸れば、「イヤイヤ」と飛加する程であつた。更に後程になつて、医師の身上を聞けは、その人は、

「眼科医である」といふ事であつた。

斯くて診察は形式的には修了した。

医者は各代表者達に向ひ、「直ちに病院を出よ」と命令した。この惨めなる状態と住友医師の心なき手荒なる事を、充分、知識の代表者等は此日、歸るを欲しなかつたが、童能の身に少しでも安静を興へんものと、医師の暴言や不親切な事柄を胸に納めて下山した。

◎ 羽子朝までの被害者の経過と

其後の容態 能心 川

午後四時頃 熱 三六度 脈 八〇

午後七時 熱 三六四度 脈 七八

冷静に復すると共に、所々に傷痛を訴ふ、後頭部一帯に負傷あり、然し医師は軽い打撲だとして、單に、ヨシユールを冷やす。

十八日 午前九時 外科 医の診察を受け

医 腹壁に疾患ある模様だが、内臓道は立刺つてゐない様と思ふが痛がるので詳しく調べられたいと云ふ事だ。